

岐阜県史跡 金山城跡第5次発掘調査の結果について

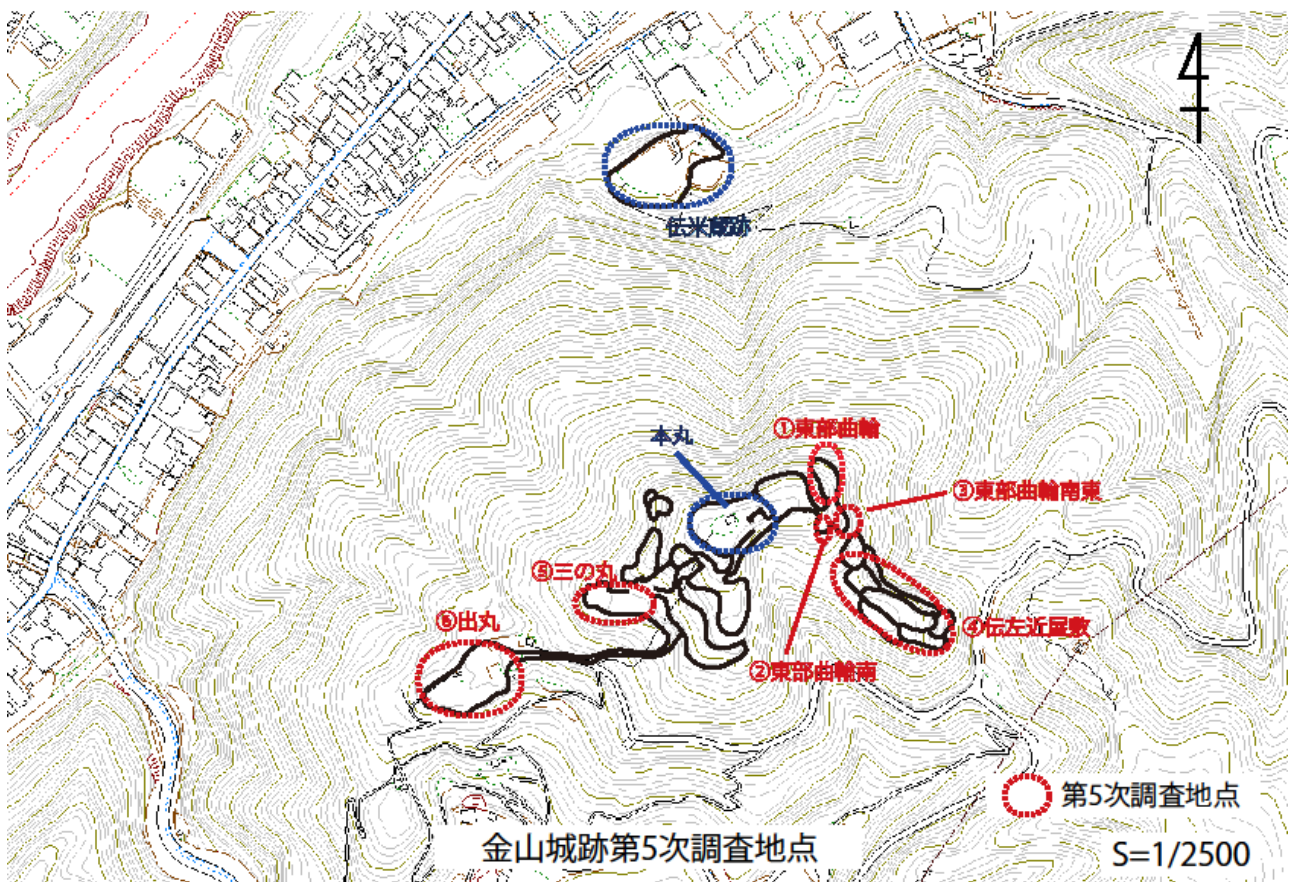
○調査機関 可児市教育委員会

○調査期間 平成22年10月20日～12月22日
(全体発掘調査期間 平成18年度～平成22年度)

○調査地点 東部曲輪、伝左近屋敷、三の丸、出丸

○調査目的 第1次～3次までの調査にて礎石建物が全ての曲輪にあることが確認されており、調査地点でも部分発掘をし、礎石建物があるのか金山城跡の遺構の状況を確認します。
また、各曲輪の石垣の状況を確認します。

○調査面積 8000 m² (内 掘削面積 80 m²程度。)



①東部曲輪

東部曲輪の平坦面ではトレンチ（溝）を設定し、一部掘削を行いました。

礎石は原位置を動いていると考えられるものも含め、12個確認されていました。礎石は0.3m~0.4m程度の川原石であり、高さはほぼ一定です。断ち割りの結果、礎石は整地面を掘り、設置後に礎石の周りに充填土を入れているものと浅い掘りこみの上に礎石を設置し、充填土を伴わないものがみられました。

南側及び東側で土盛りの状況が確認されており、平坦面を幅広く使っていた時期と、土盛りを3方向に造成し、規模を縮小していた時期と2段階の時期があることが確認されました。

出土した遺物はかわらけ、天目茶碗等です。一部、赤色の瓦（一部焼けている。）も出土しています。



礎石出土状況（西より）

川原石の礎石が並んでいる状況が確認できました。



礎石の上の土盛り（北より）

ある時期に礎石の上に土を盛り、建物規模を小さくしたようです。このような土盛りは北・南・東側にみられます。



遺物出土状況（南より）

左が川原石の礎石、右側に赤く焼けた瓦が出土しています。この場所に塀等があったかもしれません。

②東部曲輪南

南腰曲輪から東部曲輪へと続く道があったと想定されている部分です。ここでは門の礎石が2つ確認されました。北側の礎石は長さ0.56m以上、幅0.3m、南側の礎石は長さ0.8m、幅0.6mであり、二つの礎石の間は2.1mです。門付近では入口を意識し、岩盤を削っています。また、南側には石積みが確認されています。

出土した遺物は土のう袋15袋程度の瓦が出土しています。瓦の出土、門の礎石からこの場所は虎口（入口）と考えられます。



門の礎石（南より）

礎石の発見により南腰曲輪までの道があったことがわかりました。
南側の礎石付近で瓦も出土しています。

③東部曲輪南東

東部曲輪南東には2×2m程度の平坦面があり、腐葉土から土のう袋100袋程度の瓦が出土しています。出土した瓦は丸瓦、平瓦が大半を占め、飾瓦が一部です。平瓦でほぼ完形なものも含まれているため、本丸から破城の際に廃棄されたと考えるより東部曲輪南の門からの廃棄、もしくは運んで捨てたという印象です。

そこより南側の岩盤が露出している部分からも瓦が土のう袋20袋程度採集できました。



瓦出土状況（北より）

瓦が散らばった状態で
見つかりました。



瓦出土状況（北より）

上の写真のアップです。
丸瓦や平瓦が多くあり、土
のう袋で100袋程度ありま
した。

④伝左近屋敷

川原石の礎石と砂岩の礎石が計 13 個検出され、曲輪全体に建物があつたことが想定されます。北側には 2 段の石垣と造成された平坦面がみられます。1 段目の石垣は長さ約 50m と想定され、破城の際に部分的に壊されています。2 段目の石垣は現存長約 12m です。南側には石垣がないため、北側の防御を意識していると思われます。1 段目部分では一部石垣がみられない部分があるため、トレンチを設定しました。トレンチ部分では岩盤が階段状になっており、ここから左近屋敷に上がった可能性が考えられます。



礎石出土状況（西より）
左近屋敷部分では砂岩、川原石の礎石が計 15 個確認されました。



北側一段目石垣東隅部分（東より）
石垣の石が落ちており、破城の際に壊されたと考えられます。
斜面に見える小さな石は石垣の裏に入れた裏込め石です。



北側二段目の石垣（東より）
南側には石垣がないので、
北側の防御を意識していた
のでしょう。

木の根に押されて崩落し
そうなので、現在は土のう
で保護してあります。



石垣一段目トレンチ（南より）

一段目に石垣がみられない部
分があり、この場所を掘ってみ
ると、岩盤が階段のようにな
っていました。ここから左近屋
敷に上がったのかもしれません。

⑤三の丸

原位置を動いていると考えられるものも含め、計 6 個の礎石が確認されました。

水の手部分東側では高台がみられます。この部分は北側に一段の石積みや礎石もみられることから、本丸へあがる門があったと考えられます。

水の手部分では西側は岩盤を削り、東側には石垣がみられます。

三の丸では北、西、南に石垣がみられます。北側石垣の東部分は岩盤を利用しており、西部分で石垣が築造されています。

西側の石垣は北側の石垣に延長する北の角部分のみであり、全体にはみられません。

南側は西の部分で 2 段の石垣が確認できます。下の段の現存する高さは 0.6m 程度であり、部分的にしか確認できません。また、長さも 12m 程度と上の段に比べ短くなっています。上の段の石垣は約 40m 程度、現存は 2 段～3 段程度ですが、現在使用している階段部分まで続いていきます。

また、三の丸に登る現代の階段部分でも石垣が確認されています。



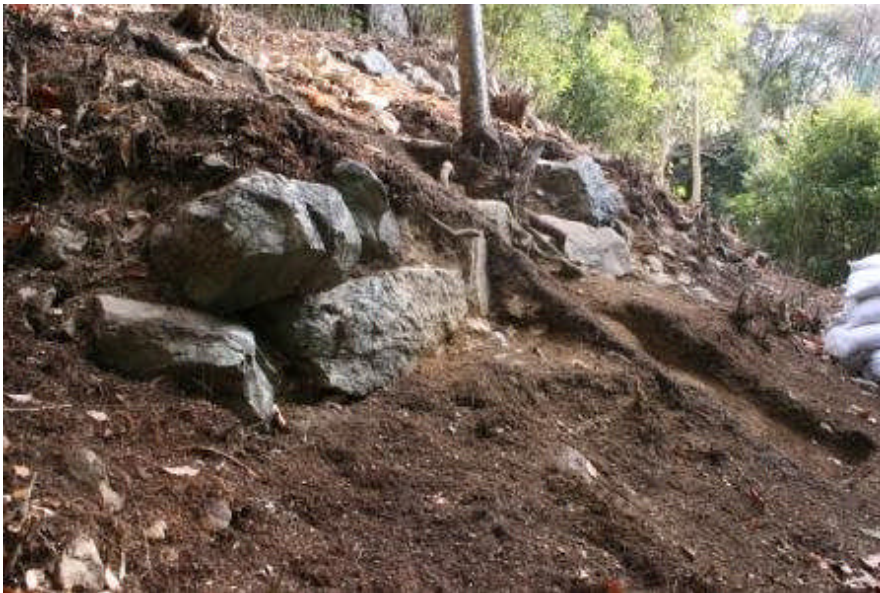
三の丸礎石（南より）

三の丸では動いているものも含め、6 個の礎石が確認されました。

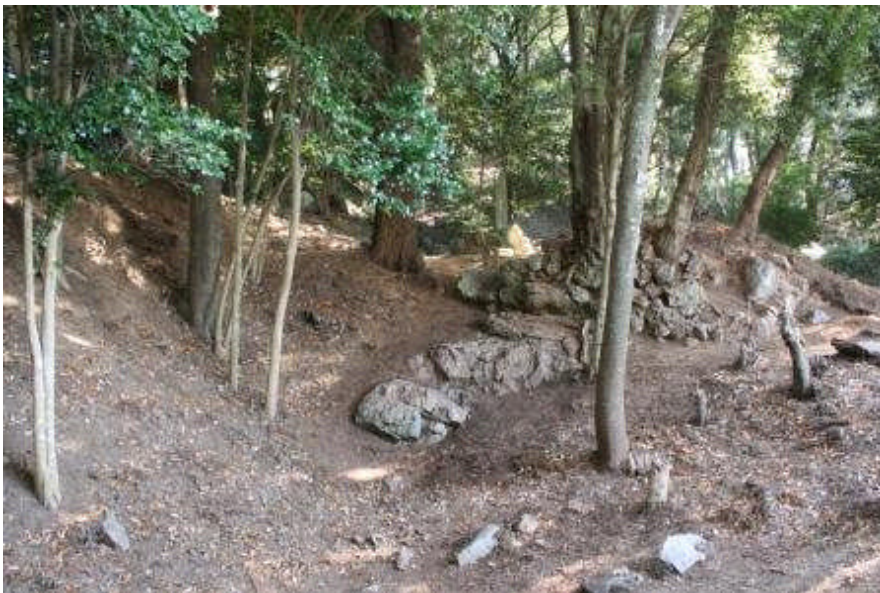


三の丸北側石垣（北より）

三の丸では北・西・南に石垣がみられます。北側は自然岩盤も利用しています。石垣の半分ほどは北の斜面に落ちてしまったようです。



南側石垣（西より）
部分的に二段になっており、上の段は階段付近まで続いています。



三の丸虎口部分（西より）
水の手から登り、東側にあがったと思われます。



三の丸水の手（南より）
右に石積み、左に加工した岩盤がみられます。

⑥出丸部分

石垣は東側隅で後世の積み直しが見られますが、南面は良好な状態で残っていると考えられます。駐車場部分では礎石に使用したと考えられる川原石が 10 個程度確認できました。



礎石配置状況（北より）

神社部分にも礎石がみられ、礎石建物があつたことが想定されます。



出丸南石垣（南より）

北側には石垣はみられないため、南方向の防御を意識していると考えられます。

○まとめ

東部曲輪、三の丸、伝左近屋敷、出丸部分でも礎石が確認され、各平坦面に礎石建物を建っていたことがわかりました。三の丸の水の手部分に虎口（入口）があることから登城路として使用されており、おそらく伝米蔵跡から登っていたと考えられます。また、東部曲輪と南腰曲輪をつなぐ道が見つかったことも大きな発見です。

金山城が機能していた約 60 年間の間で北側の敵を意識していた時期と南側の敵を意識していた時期があります。これは出丸が南側、伝左近屋敷が北側にしか石垣がみられないことからわかりました。



金山城跡第 5 次調査出土遺物